

新潮文庫

もうひとつの恋文

連城三紀彦著

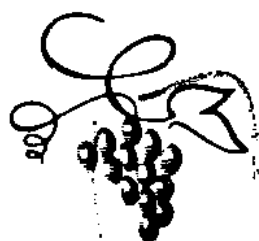


新潮社

もうひとつの恋文

新潮文庫

れ - 1 - 6



平成元年八月十五日 印刷
平成元年八月二十五日 発行

著者 連城三紀彦

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 編集部(〇三)二六六―五一
編集部(〇三)二六六―五四四〇

振替東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、二面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

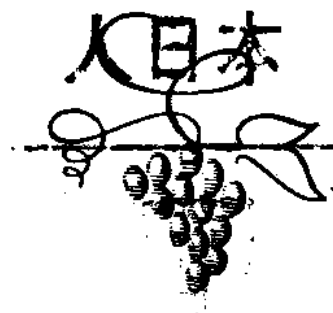
© Mikihiko Renjō 1986 Printed in Japan

ISBN4-10-140506-9 C0193

新 潮 文 庫

もうひとつの恋文

連 城 三 紀 彦 著



新 潮 社 版

4308

目次

手枕さげて……………	七
俺んちの兎クン……………	五一
紙の灰皿……………	一〇五
もうひとつの恋文……………	一四九
タンデム・シート……………	一九七
あとがき……………	二四五

『もうひとつの恋文』と連城さんのこと 一色伸幸

カット 早川良雄

もうひとつの恋文

手^て
枕^{まくら}
さ
げ
て



枕まくらなんだぜ。最初が枕まくらなんだぜ。ピンクの花柄はながらのカバーかぶせたのを、トランクの中から真っ先にとりだして、こう、胸に抱きしめて、ニッコリ笑いやがるの。そう、入ってくるなりだよ。入口に突っ立ったままであ。

「何してるんだよ」

って、俺おれ、一昨日おとといの晩も酔い潰つぶれて戻もどってきて、服のまま万年床に倒れこもうとしたところだったろう、夜中の三時をまわろうって時に、二、三度会っただけではつきり顔も憶おぼえてない女が訪ねてきたっていうだけで驚きなのに、最初から枕じゃキョトンとするより他ほかないよな。

けど、むこうの方では俺が驚いてるのなんてどうでもいいって感じで、「あつ、そういう顔すると可愛かわいいじゃない」なんて言ってさ、

「鍋なべはあるみたいだから、枕まくらさげてきたの」

入口の続きに小さな台所があるだろ、そのレンジの上に、半月前のラーメンの残りが入ったままになってる鍋見つけて、「ああ、やっぱり鍋あった。でもこの鍋じゃねえ、明日買っ

てくる。わたし、こう見えても料理うまいの」言いながら、断りもなく部屋にあがってきて、俺が酔いも少し醒めて、我に戻ったときには、狭い部屋いっぱい、トランクや紙袋からとり出した皿やら茶碗やら並んでいてさあ。

それも全部二人分ずつだぜ。

「俺が部屋では御飯食べないこと、知らないのか」

馬鹿なもんだね、咄嗟の時にはそんな言葉しか出ないのを、

「知るわけないわよ。まだ三回しか逢ってないのに」

「そうだろ、三回だろ。たった三回、それも行きつけの店で偶然、立ち話程度に……」

「でも、三回目のとき一緒に暮さなかったって言うてくれたよ」

そう、確かに言ったかもしれないよ。はつきりとは憶えてないけど、そんなの、もちろん酒場での冗談だよ。真に受けること、絶対にありえないとわかってるから、冗談半分、いや冗談全部で口にしたただけだし、今まで一人だって本気にした女はいないよ。

「じゃあ、わたしが一人目？」

俺の言葉にケロリとそう答え、それから俺が迷惑そうな様子なのにやっと気づいたらしく、「そういう顔似合わないよ。あの店で見せてくれたみたいな優しい顔してくれないかな」なんて俺の機嫌とろうと笑顔に笑顔を重ねるんだけど、「俺は酔っぱらってる時しか優しい顔人に見せないんだよ。そういうことも何も知らないで、ただの冗談真に受けて」俺がよい

よ腹立ててきたとわかると、微笑とめて、目を伏せてやつとしおらしい顔になつてさ、

「冗談とはわかつてたのよ。それほど馬鹿じゃないから……でも冗談でもすがりつきたいつて、あの時そんな気がしたのよ。さつきから平然と図々^{ずうずう}しい女みたいに振舞つてるけど、本当は必死なのよ。こんな恥かしいことしてるなら、いっそ諦^{あきら}めて、部屋飛び出そうかつて」

「諦めるって、何を？」

「わかつてるじゃないの」

最初に逢つたのは、新宿裏の例の店だっただけど、たまたま隣同士に座つてほんの二、三十分世間話しただけの間に、一目惚^{ひとめぼ}れして、一生俺の傍^{そば}にいたいって思つたつていうんだ。二度三度と逢ううちに、いよいよその気持ちが強くなつてきて自分でもどうしようもなくなつたつて。

その二度三度つてのも、俺の方じゃただの偶然だと思つてたんだけど、むこうの方は、毎晩あの店へ行つては待つてたつていうんだ。つまり俺、狙^{ねら}われてたわけだけど、そうとも知らずに半月前だったかな、三度目に逢つた時、相当酔っ払つてたこともあつて、あんな冗談言つて「名刺^{めいし}くれない」つて言うから、考えもなしに渡してしまつたわけだよ。

いや、俺自惚^{うぬぼ}れてこんな話してるわけじゃないぜ。惚^うれられたこと自慢しようつて気はさらさないね。

一度あの女の顔見てくれよ。一昨日^{おととい}の晩は雨降つてただろ？ 枕カバーとそっくりの花柄

のスカーフで顔包んでただけど、きちきちに結びすぎて膨んだ頬^ほつぺたが、こう、はみ出して、細い目が垂れてて、おまけに、あれ、目を精いっぱい大きく見せようというんだろ、マスカラを目の太さの倍ぐらいに描^かいてて、それが雨のせいで溶けかかっててさあ、あんなのにモテたからって、ちつとも自慢にやならないからさあ。まあ、そこん所は当人も気づいてるらしくて、「だったらだつたで順序踏めよ。電話かけてきて誘うとか手紙くれるとか。好きっていう言葉も聞かされないうちに枕さげて押しかけてこられたって——第一、そっちは俺の名前知ってても、俺の方では名前も忘れてるんだぜ」

そう言つてやると、

「私なんか順序踏んでたら、絶対ゴールにつけないもの。あんたよりずっとつまない男からでも誘われたことないし、私ね、愛敬^{あいきやう}よく振舞つてるから、男達も話し相手ぐらいにはなつてくれるけど、こっちから誘つたりして女の部分ちよつとでも見せたら、すぐに背むけて逃げだされることわかつてるから」

バッグから手鏡出して、頬^ほへと条^{すじ}になつて流れだしたマスカラ直しながら、ふつと自分の顔に目とめて、淋^{さび}しそうにするんだ。俺、女の器量なんて問題にしたくないし、博愛主義でいきたいって思つてるけど、顔の悪い女つてのは、あれ鏡見る時少しでも自分を綺麗^{きれ}に見ようと視線^{ゆが}歪めるんじゃないの、気持ちまで歪むんだよ、変にプライド高く澄ましてるの多いだろ？ まあ、それに比べりゃ、自分の器量わきまえてるつてのは殊勝なことだし、可哀相^{かわいそう}

な氣も起こらなかつたわけじゃないけど、俺の氣持ち何も考えないで押しかけてきた勝手さにはやはり腹が立つてさ、

「ともかく、どんな理由があつてもこんな常識違反は赦せないよ。他人と変わりない關係なのに、これじゃ押しこみ強盜と同じだろ。いや強盜の方がまじだよ。力で襲いかかつてこられたら、こつちだつて抵抗のしようがあるし、追い出すこともできるけど、女がしおらしく好きだからなんて言つてるだけなら叩きだすわけにもいかんだろ？ そこらへん狙つて来たのなら、俺、そういう卑怯な一番嫌いだからね。ほんと、強盜の方がまじだよ、一晚だけで済むんだから」

力で追い出せないぶん、言葉荒げて叩きつけてやったんだが、

「私も一晚だけでいいから——」

って、あれは媚びてたつもりなのか、そんな顔しても似合やしないのに、首ちよつと傾げて微笑して、目をパチパチさせて俺を見つめながら、

「それに私、盗みに来たんじゃないで、あ、げに、来たのよ。顔はともかく、これでも昔、ソーランドに勤めないかって誘われたことあるから」

そんなことまで言い出してさ。

「馬鹿、一晚だけって——もうその一晚も終わってるよ」

さすがにそこまで臆面もなく言われると、雨音まじりのまま窓に忍び寄り始めた夜明けの

光同様に、気持ちも白々としてきて、いくら俺だって手出す気も起こらなくて、まあ、今まで住んでたアパートも昨日のうちに引き払って戻る所もないっていうから、昼まで寝ていくぐらいのことは赦してやることにしてさ、奥の部屋の畳まで本に埋まってるのを自分で片づけて寝ろって。

俺の方は万年床に倒れてそのまますぐに眠ってしまったけど、昼すぎに目を覚ますと、白いブラウスに着替えてエプロンなんかしてて、

「雨あがったし、いい天気よ。ね、せっかく作ったんだから食べて」

って、片づいた台所のテーブルの上にホテルの朝食みたいなのが並んでるんだ。

もちろん二人分――

食べるわけじゃないじゃないか。喋る気も起こらなくてムツとした顔でドア叩きつけて、仕事に出かけたんだが、夜になって戻ると、今度は晩御飯の支度して待ってるんだよ。一晩だけって約束だったのにさあ。今夜だってまだいるんだぜ。さつき戻ったら、俺が食べないことわかってるくせに性懲りもなく御飯作って待ってて、

「ねえ食べてよ。昨日から二人分食べてるから、もう、一キロは太っちゃった」

今夜のは腕によりかけて作ったからと言うんだけど、俺の大嫌いな鶏肉を、グロテスクにどろどろに煮こんだあんな料理、食べられやしないよ。鞆かばんもおかずに飛びだしてきて、仕方なくこうやってお前の所へ来たんだけど――なあ、どうしたらいいと思う？

わずか二日のうちに奥の方の部屋片づいてるし、管理人さんには、「構治こうじがいつもお世話になってます」って挨拶あいさつしたらしいんだ。管理人のおばさんに、「何なの、あの女ひと」って聞かれて答えに困ったよ。野良猫のらねこつてのは一度餌えさやると、もう食い終わった瞬間からわが物顔で家の中歩くっていうけど、同じなんだ。たった二日なのに、今夜なんか、「あつ、それとも御飯の前にお風呂ふろ入る？ 湯加減ちようどいいわよ」なんて、もう十年は俺と一緒に暮してるって落ち着いた口調なんだぜ。これから十年、いや一生俺から離れないって、あれは、そういう口調だったな。なあ、どうしたらいいと思う……

叩き出せばいいって、それができるくらいならお前に相談になんか来ないよ。

古いつき合いなんだからわかるだろ？

俺子供の頃ころからスポーツは得意だったけど、相撲だけは駄目だめでね、押されると、なんかこのまま押されてしまわないと相手に悪いような、ふっと、そんな気がしてさ、土俵どひょうぎわ際の勝負になると必ず敗けてた。いや今だって、まがりなりにも出版社と呼べる所で編集者なんて肩書きでやってるけど、うちみたいな零細じゃ押しの一押ししかないのに、作家に電話で頼まれりゃ、「わかりました、先生、何とかしてみます」なんて返答がいつの間にか口をついてて、電話切った瞬間から頭抱えこんで、結局酒飲んで憂うれさ晴らすしかなくて、今もってあんな会社でもうだつあがらないわけだけ……

それと女とは別だって？ そうかなあ、同じだって気がするなあ、押されりゃあんな女に